

## 李文烈「うすら寒い夏」(1987)

2015年4月19日 桜沢亜伊

### 作家について

1948年ソウル生まれ。父が単身で北に渡ったため、家族で韓国国内を転々としながら育つ。ソウル大学校師範大学国語教育学科中退。1977年、短編「ナザレを知っていますか」で『大邱毎日新聞』新春文芸の佳作となり登壇。1982年「金翅鳥」で第15回東仁文学賞、1987年「われらの歪んだ英雄」で第11回李箱文学賞など、受賞歴多数あり。1982年「皇帝のために」、1984年「英雄時代」などの作品により、多くの読者を得た韓国を代表する作家の一人である。

### 登場人物

国立大学に通う慶尚道出身の兄弟(弟の視点で話が進められる)。  
二人は住み込みで家庭教師をしている。

### 兄 - 法科4年生

弟 - 国文科2年生、数えて20歳になったばかり、末っ子、兄との差は5歳。  
詩人兼評論家を目指している。

薬水洞の3兄弟 - 兄の教え子。末っ子は留守番。中学1年生と小学5年生。  
薬水洞の女主人 - 若い医者 of 愛人がいる。

新村のアホ - 弟の教え子。中学1年生。肥満児。  
新村の主人(弟の雇い主) - 節約家の商売人。

### 内容

弟が住み込みで家庭教師をする家の主人から臨時収入を得て、兄や教え子たちと共に行楽地に出かける。

弟が新村の主人から得た数千ウォン、兄が薬水洞の女主人から得た?ウォン、教え子たちの出した?ウォン=総額1万5百ウォン(兄弟の給料は月8千ウォン余り)

相談の結果、仁川の月尾島に行くことにする。兄が観光案内書で偶然知っただけで、兄弟ともによく知らなかった。  
月尾島 - 1920年代から日本人が作った行楽施設(海水を温めて入浴する施設である潮湯の大浴場やプールなど)があった。現在も遊園地などのある有名な行楽地。

タクシーで仁川まで移動

(カップルに羨望の眼差しを向ける弟と、「毛の無いサル」と評する兄)

レストランでの食事代=4,750ウォン(兄弟はビーフステーキしか知らない、教え子たちは食べなれている様子)

当初の総額1万5百ウォン(一缶ビール代?)ー往路のタクシー代ーレストランでの食事代4,750ウォン=残額2,500ウォン余り

(海水浴場までの移動もタクシー)

月尾島の海水浴場は全てが有料で、入場料を払うと帰りのバス代が残るかどうか。

→兄は教え子たちに貧しさのなんたるかを教えると言い、公衆の面前で着替えさせたり、飲み物を与えなかったりという「授業」をする。

→弟は荷物番として木陰でフランスの詩理論書を読もうとする。野外舞台で踊る人々に嫌悪感を覚える。若い女が純真な弟をからかう。女は中年男から逃げるように立ち去る。空いてるゴザを勝手に使って300ウォンまきあげられる。

先ほど弟をからかった女が、中年男から暴行を受ける現場を目撃する。女の浮気か、男の嫉妬か。

兄が帰りのバス代を貸してもらおうついでに、女性をナンパする。

帰りのバスの中で、兄の教え子である薬水洞の長男が「色情狂」の意味を尋ね、兄から「お前の母親もそうかもしれない」と言われ、他の乗客から「殴り殺されても仕方がない」と言われ、涙を流す。

兄がソウルを離れる考えを弟に告げると、弟は夏を「うすら寒い」と感じる。

感想など

作品で描かれているのは、1970年夏のできごと。李文烈はその当時、ソウル大に通っており、司法試験にも挑戦している。兄弟は作者自身の若き日の姿では。

兄弟は当時の高所得層を「権力の申し子・宝くじ当せん者」と侮蔑しながらも、自分たちがそうした人々に雇用されて一生を終えるであろうことに危機感を覚えている。

作品名の「うすら寒い夏」は、低所得層と高所得層が形成されていく時代背景のもとで、(作者自身を含む)持たざる者たちの、社会に対する憤りとそれをどうにもできないという無力感・将来に対する不安感を表現しているのでは。